イスラームにおける「他者への献身」①―義務的喜捨（ザカート）―

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

他者への献身

天理大学では、「建学の精神」の一つとして、「他者への献身」を謳っている。天理教の究極的目標である陽気ぐらし世界とは、互いにたすけ合う生き方の延長線上に到達されると教えられるからである。この背景には、親神を「をや」と仰ぐ人間は、「一れつきょうだい」という考え方がある。それゆえ、人間は互いにたすけ合わなければならない。いや、困っている人を見て、たすけずにはいられない。

こうした思いから、天理教では災害救援ひのきしん隊をはじめ、「世界たすけ」の取り組みとして困っている人々を積極的に支える取り組みを行ってきた。天理大学もまた、東日本大震災へのひのきしん活動やボランティア活動を通して、「他者への献身」に積極的に取り組んでいる。

喜捨とは何か

イスラームにおける「他者への献身」を考えるうえでは、ザカート（喜捨）がある。これはイスラームの信仰の中心に数えられる五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）の一つで、困窮者を扶助したり、共同体に資するために毎年支払うべき義務的な金銭的負担を指す。そのため、「定めの喜捨」とも呼ばれている。

「ザカート」(zakāt)は「清浄」を意味するアラビア語である。「喜捨」という翻訳語が付けられているのは、自らの財産を信仰的行為として、喜んで差し出した側の信仰的心情を表現したものということになる。その一方で、ムスリムとしての義務的な支払いという理由から、「救貧税」という言葉で説明されることもある。

イスラームの聖典クルアーンのなかで、「ザカート」という語は複数回見られる。

> 「わたしたちのために、現世も来世でも、幸福を授けて下さい。本当にわたしたちは、改悛してあなたの許に戻って来ました。」かれは仰せられた。「われは、自分が欲する者に懲罰を加える。またわれの慈悲は、凡てのものにあまねくおよぶ。それ故われは、主を畏れ、喜捨（al-zakāt）をなし、またわが印を信じる者にそれを授けるであろう（Q7:155）。

クルアーンにおいて、神による救済の対象であるのは、神を敬うだけではなく、自らの信仰的発露として財をはじめ自ら寄進する者である。

イスラームにおける「他者への献身」―２種類の喜捨―

定めの喜捨として、「断食明けの喜捨」（ザカート・ル＝フィトル）と「財の喜捨」（ザカート・ル＝マール）が知られている。前者で集められたお金は、喜捨を受け取る権利のある生活困窮者や旅人などに与えられる。それに対して、後者で集められたお金は、公共や共同体のために用いられる。ただし、ここで言う「共同体」とは、一般的にイスラーム共同体を指している。言い換えると、ムスリムではない者に受け取る資格はない。

喜捨の具体的金額としては、貯蓄の約2.5％程度と言われている。毎年、「ニサーブ」と呼ばれる金額が設定される。2021年のニサーブは54,075円である。[1] この金額を閾値として、貯蓄金額がニサーブを超えている者は、支払い義務が発生する。逆に、その金額を超えない者には喜捨を支払う義務がないことになる。

所有する財産に応じて支払い金額が変動するが、所有する財産のうち生活していくうえで必要な財産は、喜捨の金額には入らない。また、マッカ巡礼のための資金は喜捨の算定金額の対象とならないなど、状況に応じて算定される。こうした点から、喜捨とは我々の感覚でいう税金のイメージに近い。

犠牲の動物を屠る人々
（エジプト・カイロ、2012年筆者撮影）

喜捨を呼びかけるホームページ

毎年、ムスリムによって支払われる喜捨は、ムスリムの数や各自の財力となるが、相当の金額となる。喜捨で集まった財源は、イスラーム共同体の活動のために運用される。しかし、イスラームにおける共同体は国や地域で捉え方が異なるため、喜捨による財源の用い方も異なるようである。そのため、ムスリムたちに喜捨を振込むように呼びかけるホームページが、複数見られる。

喜捨の財源が、国家で一括管理されていない日本のような地域において、喜捨は、例えば名古屋モスクを増改築するための費用として用いられている。[2] モスクはムスリムが礼拝するという点で公共物であり、ムスリム同士のコミュニケーションの場として重要な役割を果たしている。そのため、増加するムスリムを収容するためのモスクの増改築は喜捨を財源として行われるのであろう。

また、喜捨の財源は断食後の犠牲祭のための財源として用いられる。ムスリムたちは断食月後に犠牲祭（イード・ル＝フィトルやクルバーン・バイラムと呼ばれる）を行うが、その際に神に捧げた動物を分かち合う。貧困にあえぐムスリムたちにとっては、肉を食べることのできる数少ない機会である。しかし、犠牲祭のための財源がなければ行うことができない。こうした状況をサポートしているのが「世界イスラーム救援」（Islamic Relief Worldwide）である。[3]

近年、クラウドファンディング、ふるさと納税、またこども食堂をはじめとして、用途を指定した財源の使用が行われている。しかし、イスラームにおいては、同胞に手を差し伸べるための相互扶助がいち早く確立されてきたと考えることもできよう。

［参考文献］
（１）「ザカートルマールと今年の日本におけるニサーブについて」（https://www.facebook.com/FukuokaMasjid/posts/3862233103820452/　2021年７月５日アクセス）
（２）「ザカート・サダカ口座」（https://nagoyamosque.com/about/activities/zakat-2　2021年７月５日アクセス）
（３）「クルバーン」（https://www.islamic-relief.org/category/seasonal/seasonalcampaignqurbani/　2021年７月５日アクセス）